

男女共同参画セッション

1

呼吸器内科における男女共同参画： 自分らしさを発揮できる呼吸器内科医局を目指して

富田 雄介

熊本大学大学院生命科学研究部 呼吸器内科学講座

男女共同参画社会とは、「男性/女性とはこういうもの(こうあるべき)」という考え方により行動や考え方、生き方を制限されることなく、男女が良きパートナーとしてお互いに尊重しあい、性別にかかわらず様々な場面で一人ひとりの個性や能力を十分に発揮できる社会である。このような社会実現のために様々な取り組みが行われてきたにもかかわらず、「男は仕事、女は家庭」といった性別による固定的な役割分担に基づく人々の意識や社会慣行は、依然として根強く残っている。男性優位の社会構造は医療界においても例外ではない。日本での女性医師の全体に占める割合は20%程度と欧米先進国の中で最低レベルであり、指導的立場の女性医師も明らかに少ない。妊娠・出産・育児・介護等のライフイベントによるキャリア形成の中断が大きく影響していることは以前から言われているが、それを支える職場の環境整備、意識改革が進んでいないのが現状である。女性医師だけに目を向けがちであるが、現在の余裕のない労働環境は、男性医師においても子育て期の長時間労働など家庭生活や地域生活を楽しむことを困難にしている。男女問わず、それぞれの人生のそれぞれの時期に希望する働き方、その多様性を受け入れ、働きやすい環境を提供することが、医師自身の心身の安定をもたらし、最終的には最良の医療提供を可能にすることとなるのではないかと。本講演では、社会の変化に対応して大学病院呼吸器内科医局はどのように変わっていくべきか、今何が必要とされているのかを熊本大学呼吸器内科の現状にも触れつつ考察を行う。

2

しなやかなワークライフバランスのススメ

吉田 知栄子

熊本大学病院 呼吸器内科

TOKYO2020の閉会式がTVで流れている。17年前のアテネ大会のときに生まれ、すっぱりと私の腕の中に収まっていた長男が、今や長くなりすぎた身体を持って隣でねそべっている。そのあとに生まれた次男にも身長を抜かれ、私は今年ついに“家で一番小さい人”になった。

この間、女性の社会進出への理解が進み、一緒に働く女性医師も少しずつ増えてきた。仕事を持つ女性は、社会人としての研鑽を積む時期と結婚、出産、子育てという人生の節目を同時期に迎えるため、家庭との両立という大きな課題に直面する。両立を志しても“医師ときどき母”もしくは“母ときどき医師”というようにその役割に軽重をつけて立ち回らねばならず、どんなに準備をしても“想定外”という状況に遭遇する。一方で、毎日の家庭でのルーティンワークは減ることはないため、安定して仕事に割ける時間は減らさざるを得ない。それは、“努力をすれば必ず夢はかなう”と教えられてきたなかで、“できないこと”を受容し、さらにそれを一緒に働き支えてくれる仲間に伝える作業は思っていたより心のハードルが高い出来事だった。一方で、子育てを通じた人との出会いや経験は、物事の考え方や行動において多様性の源となり、ある種の“しなやかさ”を学ぶことで、それが臨床や研究の場にも活かされると感じている。

子どもたちにとっては、家に母親がいないことで、転んだ時や学校で嫌なことがあったときに一人で立ちあがり、そっと涙をふかざるをえなかった経験もあっただろう。でも幸い、子どもたちもたくさんの人の優しさや愛情に触れる機会を逆に得て、その恩恵をうけて育ってきた。その子どもたちも、もうすぐ巣立ちの時期を迎える。“いいお母さん”にはなれなかったが、“ともに汗や涙を流し、同じ志をもつ仲間がいること、そして仲間のために自分ができることの最善をつくすことが、仕事や人生において大切なことだ”という思いだけは伝えることができたかもしれない。男性・女性の区別なく、お互いのpriorityを尊重しながらみんなで仕事ができる環境が“男女共同参画”の目指すところではないかと思う。少ない経験のなかからではあるがライフステージごとの時間や役割バランスの変遷とそのなかで“常に足りない時間”の検出のための工夫点などをお伝えしたい。そしてそれが、今、子育てをしながら日々奮闘している先生方の一助となればと思う。